夏制覇の夢 後輩に託す

大高ジャーナル

発行所
鹿児島県立大島高等学校
新聞部
奄美市名瀬安勝町７―１

試合終了後、大勢の観客で埋まる三塁側スタンドへ向けて整列する大島ナイン。３年生にとっては最後の夏。様々な思いを持ち、涙を見せる選手達にスタンドからは大きな拍手が送られた。

第１０４回
全国高校野球
鹿児島大会

猛追も甲子園ならず

夏の大会　初の決勝

２―３で鹿実に惜敗

夏の甲子園をかけた第１０４回全国高校野球選手権鹿児島大会が、7月2日から24日にかけて開催された。春夏連続の甲子園出場を目指してこれに挑んだ大島は、離島勢として初の決勝の舞台に進出し、名門の鹿児島実業高校と対戦。接戦の末敗れたものの、学校史上最高成績の準優勝に輝いた。また、試合が行われた平和リース球場（鹿児島市）には非常に多くの観客が訪れ、急遽外野席が解放されることに。大島を応援するために駆けつけた人も多く、全力でプレーする大島ナインにエールを届けた。

全国高校野球選手権鹿児島大会　大島―鹿児島実

決勝　2022/7/24　10時05分　試合開始		
鹿児島実	０００００２１００	３
大島	０００００００００２	２

決勝は大島・大野、鹿実・赤嵜の両エースによる投手戦となったが、六回に鹿実が２点を先制した。しかし九回裏二死から、大島は粘る。代打・青木の２点適時二塁打で１点差に迫った。しかし反撃もここまで。春夏連続の甲子園とはならなかった。

エース大野　魂の１３５球

名門相手に、エース・大野稼頭央（３―５龍南中）は吠えた。両チーム無得点で迎えた五回表、二死満塁のピンチの場面。四番打者を相手に、大島バッテリーは真っ向勝負を選んだ。左腕から放たれる自慢の直球がうなりをあげ、三振を奪う。大野の眼には、闘志が溢れていた。鹿実は、昨年の準々決勝で対戦して敗れた相手。その時もマウンドにいた大野には、雪辱を果たそうという思いが人一倍強かったのだろう。

３点を先行された後も気迫の投球は続き、九回二死の場面でも、直球で三振を奪った。最後の１３５球目に計測されたのは、この日最速の１４４キロ。力強い直球に込められたのは、「島から甲子園」の夢へのまっすぐな思いだった。強豪からの誘いを断って島に残る決意を固め、チームを甲子園へ導いた剛腕。「一緒に高校野球へ挑んでくれた島の人たちには、感謝しかありません」と語った彼は、夢を次の世代へ託した。

強豪鹿実に力投するエース大野稼頭央

九回裏二死からの猛反撃

大島の「すっとごれ」（奄美の言葉で「負けるもんか」）打線は、相手エースの緩急自在な投球に苦しめられ、なかなか本塁を踏むことができない。３点を追う展開で迎えた九回裏の攻撃でも、相手の好守もあって二死まで追い込まれてしまう。

しかし、選手たちはまだ諦めてはいなかった。中優斗（３―５笠利中）が相手のエラーで出塁すると、代打・体岡大地（２―１喜界中）が中前打で繋ぐ。得点圏に走者を出したこの場面で、打席には代打の青木蓮（３―２朝日中）が入った。

相手投手の暴投で、二死二、三塁と好機は広がる。そこで青木は、内角高めに浮いた甘いボールを見逃さずに引っ張った。痛烈な打球がレフトを襲う。起死回生の２点適時二塁打だ。二死から一点差に詰め寄る一打に、三塁側スタンドはお祭り騒ぎ。最後は一歩及ばなかったが、名門相手に善戦した選手たちには、惜しみない拍手が贈られた。

「よくやった」「胸を張って帰って来てね」などの温かい言葉が球場に溢れた。二回戦で対戦した甲南の主将で、離島甲子園では奄美市選抜チームの一員として大島ナインと一緒にプレーした山之内慎さん（小宿中出身）は、「大島は応援したくなるチーム。九回の粘りがその由縁だと思う。観客席から試合を観て、彼らは本当に愛されているなと感じた」と戦友たちを讃えた。

離島のハンデを乗り越え、快進撃を続けた一年間。コロナ禍による苦境の中であっても、選手たちは「島から甲子園」の夢を諦めなかった。最後まで堂々と戦い抜いた安陵球児の姿は、多くの人に感動と勇気を与えたに違いない。

〔赤井洸太〕

代打出場した青木は、九回、二死二、三塁で２点適時二塁打を放ち会場は興奮に包まれた

惜敗に悔しさをにじませベンチに戻る大島ナイン

夏の甲子園かけ奮闘
全国高校野球鹿児島大会
特集号

1面 猛追も甲子園ならず
2面 野球部鹿児島大会奮闘記
3面 東大 大高生サポートへ
4面 コロナ禍乗り越え文化祭
5面 部活動の活躍一覧
6面 島人釣り人発見他

大高ミニギャラリー

国語科の福壽辰先生撮影の左前足の白いアマミノクロウサギ

奄美大島＝鹿児島県本土から南西約370km，面積712.35平方km，広さ日本５位(本州等４島除く)の島，亜熱帯海洋性気候，奄美群島国立公園の一部

大高坂

鹿児島大会決勝は、惜しくも２対３で大島高校野球部の敗北に終わった。しかし、東京から観戦に来ていた本校野球部ＯＢの上谷拓郎さん（本校60回卒）は「負けたけれど本当に価値がある」と語った。▼これまで離島の高校は、他校との練習試合の難しさや、多額の遠征費等、離島ならではのハンデに苦しんできた。野球においては、有望な選手は島外の高校に進学することも多かった。それでも、本校野球部はそうしたハンデをたゆまぬ努力と工夫で乗り越え、離島公立高校も実力で強豪校と互角に戦えることを証明した。▼野球部の活躍は島民を奮起させ、全国の奄美出身者が球場に駆けつけた。▼上谷さんは野球部の活躍を通じて、多くの島出身の人々が心を一つにできたことに「島人で良かった」と語り、「この快進撃が次の世代にも繋がっていくのではないか」と後輩達への期待をにじませた。▼「島から甲子園」を合言葉に、センバツでの甲子園出場、夏の県大会での善戦を見せてくれた野球部。「離島のハンデ」を言い訳にせず、努力する大切さを私たちに教えてくれた。

〔川田翔太〕

〔お知らせ〕大高ジャーナルは，本校の「大高ブログ」からバックナンバーも含めてご覧になれます。

※本校生の個人名に併記した中学校名は，出身中学校です。

全国高校野球選手権　鹿児島大会決勝　奮闘記

外野席にあふれる応援団 オール奄美 心ひとつに

全国高校野球選手権鹿児島大会の決勝が行われた7月24日、鹿児島市の平和リース球場には、大高野球部を応援する人々が全国から訪れ、三塁側スタンドを埋め尽くした。

学校では、夏休み中の日曜日ではあったが、希望する生徒たちが登校し、テレビ中継をスクリーンに映して観戦、大島ナインの健闘を讃えた。

多目的ホールから約60名が声援を送った

外野席にあふれる応援団

鹿児島実業対大島の決勝戦を一目見ようと人々が押しかけた。

試合開始後も多くの人が入場できない異例の事態。県大会では初めて外野席が無料解放され、外野手の後ろからも多くの観客が熱戦を見守った。

監督の帽子かぶってみた

ピンチの場面で仲間をリラックスさせようと、準々決勝・出水中央戦から、他の選手の帽子を借り、伝令に向かっていた上原賢寿郎（3ー3金久中・写真の集団右端）。決勝では「啐啄同時（そったくどうじ）」の文字の書かれた塗木監督の帽子を被り仲間のもとへ走った。SNSでも反響を呼んだ微笑ましい場面。

監督自身も、上原の帽子をちょこんと被りおどける姿に選手に笑顔が広がった。

エース大野　吠える

大島が3点を追う九回表、三振を奪い吠えるエース・大野稼頭央（3ー5龍南中）。大野はこの回の鹿実の攻撃を三者凡退で抑え、この日1番の雄叫びをあげ大島の反撃へと繋げた。

体岡も吠える

九回裏、併殺打で二死になった後、前の打者が相手のエラーで出塁。この大一番で代打として出場したのは、春のセンバツで9回に代打で出場し安打を放った体岡大地（2ー1喜界中）選手。今回も、センバツと同じセンターへの安打を放ち、一塁上で渾身のガッツポーズ。

同郷の絆

六回、七回と大島ナインは立て続けに失点し、0対3とリードされて迎えた七回裏。二死ながら二、三塁とチャンスをつくった大島ナイン。迎えたバッターは、今大会絶好調の美島永宝選手（3ー2金久中）。

打席に入る前に声を掛けたのは、中優斗選手（3ー5笠利中）。「今までのお前なら必ず打てる」と鼓舞して打席に送り出した。

円陣

ここまで相手投手から1点も取れず、0対3でリードされた展開で迎えた最終回。塗木監督はいつも以上に選手たちを鼓舞し、円陣を組んだ選手たちは気合のこもった返事で返し、なんとしてでももう一度甲子園の舞台に立とうという気迫を見せた。

思いは次世代へ

表彰式後の行進の様子。春夏連続の甲子園出場は逃したが、学校史上初の快挙となる夏の鹿児島県大会「準優勝」に輝き、夏の甲子園出場への思いは次世代へ託された。

記事・写真〔米田博翔　関佳世〕

野球部 強さの秘訣 奥トレ！に記者密着

奄美中を熱狂させたセンバツ甲子園出場から2か月が経ち、島では羽アリが飛び交う6月、大島ナインは夏の甲子園出場に向けて秘密の特訓をしていた。その練習を、本紙記者が体験！　過酷さの中に、絶えない「笑顔」。大高野球部の強さの一面を感じる取材となった。

野球部の奥裕史コーチ（中央）の指示が工場内に響く

野球部の全体練習が終わった後、野球部の十数人がある場所に集まって夜の秘密特訓をしている。通称「奥トレ」。

この奥トレを行っているのは、野球部の外部コーチを務める本校OBの奥裕史さん（49歳）。自身の職場である小浜自動車工業の敷地内で野球部員の自主練をサポートしている。

この奥トレには、野球部の中でも自主的に自分を追い込みたいという志願者が集う。エース大野稼頭央投手（3ー5龍南中）や秋の九州大会でホームランを放った美島永宝選手（3ー2金久中）も常連だ。

夕刻になると、オイルの匂いが漂う中、段ボールを選手たちが工場内に手際よく敷き始める。私たちが取材した時は、夏にも関わらず選手たちは、長袖長ズボンという出で立ち。奥コーチによると「夏の暑さに慣れるため、練習から長袖長ズボンを着させている」とのこと。その「本番さながら」の練習姿勢にはピリピリとした緊張感も漂う。

「奥トレ」で奥コーチ直々に指導を受ける赤井記者（右）

トレーニングはまず4班に分かれて行われ、アップとして屈伸・伸脚をそれぞれ200回ずつ行う。それが終わったら、メインのトレーニングがスタート。1時間を4つのクールに分け、トレーニングをローテーションする。

内容として、約15分間ずっと縄跳びを跳び続ける班、体幹トレーニングをする班、工場に置いてある機材を巻き上げるトレーニングをする班、バットを頭上に持ってきてそれを前後に50回下ろす動作と、スクワットを200回行う班がある。

練習メニューを聞いただけで筋肉痛になりそうな「奥トレ」に、今回は特別に2名の本紙記者が挑戦した。本紙で野球の記事を得意とする赤井記者は、奥コーチの指導の下、バットを頭上に持ってきてそれを前後に50回下ろすトレーニングに挑戦、途中で腕は震え、やっとの思いで終了。「言葉に表せないほど、とてもきついトレーニングだった」と振り返った。翌日は、筋肉痛に苦しんだのは言うまでもない。

仲間との練習後のプロテインとおにぎりが何よりもの楽しみ

練習の最後には、おにぎりとプロテインで栄養を摂るのが奥トレ流。黙々とほおばる部員たちに、笑顔があふれる。

「奥トレをしてきたことで打球が飛ぶようになり、いい送球を投げられるようになった。秋の九州大会のホームランも奥トレの成果だと思う」と美島選手。正捕手西田心太朗選手（3ー2金久中）は「奥トレはきついのでメンタル面でのトレーニングにもなる。地道に奥トレをした事で強い打球を飛ばせるようになり、盗塁したランナーを刺せるようになった」と語った。

また、取材をして印象的だったのは、きついトレーニング中も終始笑顔が絶えないこと。選手たちによると「奥トレはきつい。だけど、みんなと楽しくトレーニングをするから続けられる」と口を揃える。大高野球部のモットー「エンジョイングベースボール」の一端を見た気がした。

こうした地域の方々の無償のサポートが、センバツ甲子園出場や、夏の甲子園予選の決勝戦の粘りにつながったのだろう。

〔米田博翔〕

東京大学　大気海洋研究所

大高生の学びのサポートに意欲

東京大学大気海洋研究所（千葉県柏市）は、７月から奄美大島での調査を始めている。

研究拠点は、今のところ瀬戸内町須手の東大医科学研究所奄美病害動物研究施設内に置かれ、地球温暖化にともなう日本の亜熱帯化を見据えて、亜熱帯である奄美での調査を行うという。それと同時に、奄美群島の高校生への学びのサポートに高い関心を寄せている。

大高生と共同した探究活動を計画

新聞部では、オンラインで東京大学の大気海洋研究所の横山祐典教授と、平林頌子講師にお話を伺った。

Q　大気海洋研究所とはどのような組織ですか

A（平林）「大気海洋」だけでなく、幅広く、生態系や気候変動など地球表層に関する分かっていないことを研究し、社会貢献につなげていくことを目標とした組織です。あらゆる現象を解明するために、いろいろな分野のグループが一丸となって研究しています。

Q　なぜ、瀬戸内町に拠点を設けたのですか

A（平林）　岩手県には亜寒帯、親潮の研究拠点である大気海洋研究所大槌センターがあります。一方で、亜熱帯、黒潮を拠点とする施設がなくて、そこで奄美に着目しました。日本では亜熱帯化が進むことが予想されていて、台風や豪雨の甚大化、サンゴの白化、生態系の変化が危惧されており、「亜熱帯の研究が緊急性が高い」という意識を持っていました。

（横山）亜熱帯といえば、沖縄や琉球諸島がありますが、人口が多く、開発が進んでいて、人間の影響が大きい状況です。一方、奄美の自然は、人間活動の影響が比較的少ないことから、ここをベースラインにしようと決めました。

横山教授（左から2人目）と平林講師（左端）は、7月に本校校長室を訪れて、本校生の探究活動への協力に意欲を示した。

東京大学
横山祐典 教授

Q　今まで高校生への学習支援はどのようなことをされてきたのですか

A（平林）「海と希望の学校イン三陸」です。津波の被害を受けた三陸の人たちにとって、海は恐怖の対象でしかない時期がありました。しかし、三陸独自の文化の魅力を知り、「海っていいな」と思えるような活動を行っています。具体的には、大槌の高校生にサンプリング等の研究調査を手伝ってもらっています。決して私たちが研究のゴールを教えるのではなく、自分たちで手を動かすことで、研究の意義や自分なりのローカルアイデンティティを見つけ出してもらえるように工夫しています。

東京大学
平林頌子 講師

Q　奄美での学習、研究支援の計画はどのようなものですか

A（横山）「海と希望の学校イン三陸」のように地元の高校生と一緒にサイエンスを楽しみたいです。現在計画しているのは、地域密着型のアウトリーチ活動「海と希望の学校イン奄美」です。科学や、周りの環境に関心をもって、例えばニュースで環境問題や気候変動が流れたときに「どういうことが起こっているんだろう」とアンテナを張れる人になってほしいです。そのために、共同での探究授業や出前授業を計画しています。また、我々は、色々なサポートを直接やるというactorとしての役割もありますが、専門家の先生や東京大学などの大学の先生につなぐhubとしての役割も考えています。

大島海峡を試験飛行するドローンを見つめる佐多さん

大島高校生には、私たちがお手伝いできることがありましたら、どんどん提案してほしいです。

〔隈元莉々亜〕

ドローンで海峡つなぎ「買い物難民」をなくそう

奄美大島の南部に位置する瀬戸内町。そこでは今回瀬戸内町古仁屋から加計呂麻島、請島、与路島への生活物資をドローンで届ける取り組みを日本航空、日本エアコミューターなど4社と「ドローン活用に向けた連携協定」を締結し、事業を進めている。

瀬戸内町役場
佐多　勝さん

今回は瀬戸内町役場企画課産業立地係の佐多勝さん（48歳）にお話をうかがった。

6月28～30日に実施された配送実験（買い物代行・救援物資輸送）の様子

瀬戸内町の古仁屋と加計呂麻島、請島、与路島は昔からフェリーで結ばれており、島民の大切な交通手段として必要とされている。しかし、天候が変わりやすい島では、船も止まってしまうことが多い。それによって数日間、物資が奄美大島に次ぐ二次離島に届かないことが多々あり大きな課題となってきた。

その解決について模索していた佐多さんは、物資を二次離島に届ける取り組みが、長崎県の五島列島でドローンを使用して行われていることを知り、「瀬戸内町でもできないか」と考え令和2年7月ごろに検討を始め、今年6月に実証実験を始めたという。ドローンは日本製の産業用ドローン「プロドローン」を使用しており、5～30kgくらいの物資を運ぶことができる。

また、海が荒れてフェリーが欠航したり、雨が降っていたりしても物資を運ぶことができ、風速10～15ｍの風に耐えられるという。操縦は一般的なラジコンと変わらないそうで、操縦は比較的しやすいという。

ドローンはフェリー乗り場がある、「せとうち海の駅」の近くの空き地から飛ばしており、6月に実証実験をした瀬相港まで約10分から12分ほどで到着する。

フェリーと違っていつでもどこにでも物資を送ることができ、気軽に送ってもらうことができるようになるという。また、二酸化炭素を排出しないので、環境への負荷も少ないという。

今回の実証実験が行われるまでに予算面の検討や、コロナウイルスの影響などで約2年もの時間がかかったという。「来年度から本格的に実証していきたい」と佐多さんは意気込んだ。

〔脇田昌吾〕

論説

大島ナインの健闘に学び離島のハンデ乗り越える挑戦を

高校野球夏の鹿児島県大会決勝、大島高校対鹿児島実業高校は、2－3という結果で幕を閉じた。夏の甲子園には惜しくも届かなかったが、その戦う姿に胸を打たれた人々は多かったことだろう。「島から甲子園」を合言葉に勝ち取った春の甲子園出場や、夏の甲子園をかけた健闘は、離島校のハンデは、努力と工夫を重ねることで乗り越えられることを教えてくれた。

一方で、離島ならではのハンデは、スポーツ以外にも存在する。

例えば学習面においては、特に小中学校では、学校同士の物理的な距離や、少子化や過疎化による学校の小規模化により、他の学校との関わりや、生徒間の学びについての刺激が少ないことが指摘されてきた。また、高校においても、鹿児島本土のように大学が近くにないために上級学校での学びを直接に感じる機会は少ないことや、予備校等があまりないこともあり、大学受験に対しての刺激は決して多くはない。

しかし、学習面において奄美は大きな変化を迎えている。

今年7月、東京大学の大気海洋研究所による奄美での気候変動に関する本格的な調査が始動した。研究拠点となる瀬戸内町須手の研究所には様々な分野の研究者や教授が集まり、幅広い視点からの調査が行われる。

そして、研究と並行して、地元の高校生に対する教育支援も計画されていて、すでに与論高校では「サイエンスキャンプ」という東京大学主催の科学プログラムが開催された。大島高校への教育支援も検討されていて、実現すれば、私たちは東京大学の方々と交流し指導を受けることができるようになる。現在校内で行われている鹿児島大学からのリモートの授業等とあいまって一層学問的な刺激を受ける機会は増えることだろう。

このことについて新聞部では、東京大学の方々にリモートで取材をしたが、ＩＣＴをうまく活用すれば、交流の機会はいくらでも作ることができる時代となってきていることを実感した。

また、暮らしのハンデを乗り越える新たな取り組みも注目されている。今年6月に、瀬戸内町で、大島海峡をドローンでつなぐ物資輸送の実験が始まった。瀬戸内町では、台風などで定期船の欠航が起こったとき、「買い物難民」が発生し、人々が生活物資を得られない問題があった。

こうした課題に、瀬戸内町は2年前からに日本航空など4社と連携協定を結び、加計呂麻島等に物資を運ぶ実験を行っている。現在、早期の運用開始が目指されていて、フェリーの欠航で物流が止まってしまうという、離島の最大の課題の解決が期待される。

このように奄美では多くの革新的な動きが高まっている。

学び・暮らしの分野のハンデが乗り越えられるようになっていけば、一層住みやすい地域となるだろう。　そして、ハンデを乗り越えるだけではなく、離島だからできる学び、離島だからこそできることが増えていけば、さらに奄美は魅力的な地域になっていくのではないだろうか。

高校生である私たちも「大島ナイン」からもらった元気を活かし、地域の課題解決のために積極的に行動していきたい。

〔大高ジャーナル〕〔畠山葉生〕

第73回 文化祭 特集

コロナ禍乗り越え「多様性」多彩に表現

6月12日（日）、第73回文化祭が開催された。今回は、初の試みとして統一テーマを設定して実施。テーマ「多様性」を意識したステージ・展示が工夫された。コロナ禍の影響で大きな制約が課せられた昨年度と比べて、今年は教室展示の自由観覧が可能になるなど、制限が少し緩和された。バンドの演奏や劇の上演、飾り付けされた教室など、コロナ禍での窮屈な日常を過ごしている生徒たちも、特別な一日を大いに楽しんだ。

ステージ部門 生演奏に感動

午前のステージ発表は体育館で実施された。感染症対策のため入場者数は制限されたものの、ステージの生演奏を鑑賞することができ、生徒たちは胸を踊らせた。

特別な1日の始まりを告げたのは、2年生の5人組、COSMIC。かごしま総文祭のテーマソングを作曲したボーカルの上原奈々さん（2―6金久中）が作曲し、キーボードの山田茉和さん（2―1金久中）が作詞したオリジナル曲「楽しい綱渡り」など2曲を演奏した。

3年生2人組のmoonsは、出会いへの感謝を胸に「マリーゴールド」「僕のこと」を熱唱し、終盤には、「ミラクルYUさん」こと鈴木侑さん（3―5赤木名中）をはじめとする唄者3人組が島唄を披露。昨年度は、全てオンラインだった有志によるステージ発表。生演奏を鑑賞する日常が復活したことは、今回の文化祭の象徴と言えるだろう。

書道部のパフォーマンスのフィナーレ

入場者数の制限の観点から、3年生は体育館会場で直接鑑賞、1・2年生は教室からオンラインで鑑賞となった午後の部のステージ発表は、書道部のパフォーマンスから始まった。精力的に活動してきた彼らが集大成として掲げたのは、特大の「逢」の文字。一筆に込めた思いは、きっと観た人全員に届いたに違いない。3年1組は、学校の七不思議をテーマにした渾身のミュージカルを上演した。

ダンス部は奄美の日本復帰をテーマに熱演

ダンス部は、奄美の日本復帰をテーマに創作ダンスを披露。日の丸や星条旗などを用いながら、表情豊かに力強く踊った。特筆すべきは、これを部員自らが考案したということ。着実に表現力を身に付けてきた彼らの演技が、私たちに語りかけているようだった。フィナーレを任されたのは吹奏楽部。「銀河鉄道999」などの演奏で会場を盛り上げ、定番の「テキーラ」で締めくくった。

展示部門 多様性テーマに 社会問題も追究

昨年度の文化祭では、観客の密集を避けるために、各クラスでまとまって移動し、各展示物を時間を制限して観覧するツアーガイド方式が採用された。今年度の文化祭では、感染症対策を十分に行った上で、観覧する時間に制限を設けず、生徒達が自由に移動できるようになった。展示部門でも「多様性」をテーマに多彩な作品が制作され、生徒達の目を引いた。

1年1組は、最初に女性が参加した大会やLGBTQの方が参加した大会などのオリンピック・パラリンピックの歴史を年表にまとめた。観覧した武佐陽七汰君（2―6朝日中）は、「内容がとても勉強になった。展示の仕方も教室全体を使って上手だと思った」と語った。

奄美の森の生物多様性を表現（2―3）

2年5組では、新型コロナウイルスを題材にした動画が上映された。この作品では、コロナ禍における差別を無くし、協力することの大切さを訴えた。

文化系の部活も、各々の活動で作った作品を通して、生徒達の個性を伝えていた。美術部では、部員一人一人が水彩やデジタルイラストなど様々な形で「多様性」ある作品を展示、その完成度の高さに注目が集まった。

他にも、生徒達の個性や魅力、価値観が手形アートやモザイクアート、フォトスポット、動画などに込められ、各教室等に展示された。生徒達は一つ一つ時間をかけて観覧していた。

タナガ捕り体験コーナー出現（国語科）

今回、ユニークな展示として人気を集めたのが国語科の先生方による、奄美の夏の風物詩「タナガ捕り」体験コーナーだ。水槽の中のタナガ（奄美の淡水に生息する手長エビ）は国語科の先生方が事前に捕まえたもの。水槽に入れられたタナガを、奄美の清流さながらに、小さな網ですくって捕る体験ができる。タナガ捕りを体験したことのない生徒もいる中で、生徒達は歓声を上げて夢中になっていた。

文化祭実行委員長の鈴木侑さんは、「コロナ禍で制限がある中でも、楽しい文化祭にしたいという思いで準備しました。達成感でいっぱいです」とコメント。

校内に笑顔が溢れたこの1日は、私たちの大切な思い出として残るに違いない。

〔時田琥太郎　赤井洸太〕

クイズ コクト君とまーじんま！

Q. 奄美大島の夏の風物詩「舟漕ぎ競争」で使用される舟は，2つの特長をもつ舟として大正10年に考案されました。その特長として最もあてはまるのはどれでしょう。（答えは6面）

①直進性と耐荷重性
②直進性と安定性
③直進性と装飾性

新聞部

とうきょう総文に参加して かごしま総文に向け 決意新たに

7月31日から8月4日にかけて、東京都で第46回全国高等学校総合文化祭が開催された。大島高校新聞部は第69回学校新聞コンクールで1席を獲得したことで、この総文祭への出場権を獲得。8月1日から3日にかけて開催された新聞部門へ、本校から3名の記者が鹿児島県代表として参加した。全国の高校生と共に交流新聞を作成し、新聞作りの技術を磨きあった。

全国高等学校総合文化祭とは、「文化部のインターハイ」と呼ばれる全国規模の芸術文化活動の祭典。新聞部門のほかにも、全19部門で開催されている。全国から高校生が集まって日頃の活動の成果を披露し、全国的、国際的な生徒の交流を行う場だ。

来年度は鹿児島県での開催が決定している。

新聞部門
生徒実行委員長
有田結愛（ありたゆめ）
（2―1朝日中）

新聞部門は千代田区の三輪田学園中学校、高等学校で開催され、全国の新聞部、新聞委員会の生徒と共に取材活動と交流新聞作成を行った。

1日目は生徒交流会と、事前に決められた班に分かれての交流新聞編集会議に参加した。初めて顔を合わせる人たちと班を組むことになったが、お互いの新聞について話をすることですぐに打ち解けられた。

交流新聞を作成する様子。全国の新聞部のレベルの高さに驚く。（右から2人目が本紙の赤井記者）

2日目は、交流新聞作成のための取材活動を行い、東京の魅力を肌で感じた。取材コースは、産業や歴史、交通などのさまざまな観点から設定されており、全部で11コース。私は「多文化共生都市、新宿」というテーマで日本ミャンマーカルチャーセンターと、リトルヤンゴン高田馬場、そしてしんじゅく多文化共生プラザを訪問した。

しんじゅく多文化共生プラザでは、担当者の方に話を聞き、区民の約1割が外国人である新宿区の多文化共生の政策について詳しく知ることができた。奄美大島にはあまり外国人の方がいないため、とても新鮮な気持ちで取材ができた。

取材後は、交流新聞作成に移った。私は、ミャンマーの食文化に関する記事を担当。新聞は約4時間で完成させなければならないため、作業は急ピッチで進む。班員と協力しながら何とか時間内に新聞作成を終えることができ、とても大きな達成感を得ることが出来た。

そして、その後閉会式が行われ、私たちは次年度開催県の代表として挨拶と総文祭Tシャツ交換セレモニーに出席。来年度は私たちが生徒実行委員会として、総文祭の運営を担うことへの自覚が高まった。

閉会式で、東京都の生徒実行委員長とTシャツを交換して次年度開催県としてバトンを受け取った。（鹿児島県は青いTシャツ）

新国立競技場での研修取材に参加した様子

最後には、新国立競技場での研修取材があった。実際にトラックを走ったり、オリンピックの表彰台に登ったりして、競技場の雰囲気を肌で感じることが出来た。

新型コロナウイルスが拡大している中であったが、総文祭が無事開催され、全国の高校生との交流を深められたことはとても貴重な経験になったと思う。この経験をこれからの新聞作りに生かして、より良い大高ジャーナルを作成していけるよう励んでいきたい。また、来年の総文祭に向けてこれからの準備も頑張っていきたい。

〔有田結愛〕

空手・水泳など活躍

春夏の主な戦績

文化祭でも大活躍のダンス部

女子バレーボール部
〔県高等学校新人体育大会〕第３位

水泳部
〔県高等学校春季水泳大会〕男子50M自由形　第1位　和田慎平（３―１小宿中）　男子50Mバタフライ　第3位　福山裕斗（３―２小宿中）　男子４×50Mフリーリレー　第３位〔県高等学校総合体育大会水泳競技〕男子50M自由形　第1位　和田慎平〔全国高校総合体育大会（四国総体）〕男子50M自由形　予選第21位　和田慎平

秋には栃木国体に出場予定の水泳部の和田君

空手道部
〔第56回全空連鹿児島県空手道選手権大会〕個人戦　第1位　平田こはな（３―１名瀬中）〔県高等学校総合体育大会空手道競技〕女子個人形　第1位　平田こはな〔国民体育大会第42回九州ブロック大会〕少年女子形　第３位　平田こはな

陸上部
〔県高等学校総合体育大会　陸上競技〕男子　５000M競歩第3位　原勇輔（２―５東城中）　男子　やり投げ第5位　丸田脩人（２―３朝日中）

貫禄の「形」で活躍する平田こはなさん

〔第75回全国高等学校陸上競技対校選手権大会南九州地区予選大会〕男子５000M競歩　第５位　原勇輔　〔第77回九州陸上競技選手権大会〕一般男子の部　５000M競歩　決勝ラウンド第６位　原勇輔

ダンス部
〔第35回鹿児島県高等学校総合体育大会ダンス発表会〕優秀賞（第2位相当）

野球部
〔第104回全国高等学校野球選手権大会鹿児島県予選大会〕　準優勝

放送部
〔第69回NHK杯全国放送コンテスト鹿児島県予選〕校内放送研究発表　研究奨励賞　研究テーマ「走れ放送部」

吹奏楽部
〔第67回鹿児島県吹奏楽コンクール〕高等学校A部門　金賞　〔第46回鹿児島県高等学校音楽コンクール〕木管楽器部門　金賞（オーボエ）松原ゆき（３―１朝日中）　金賞（アルトサクソフォーン）渡邉美優（２―５龍南中）

東京での全国大会にリモートで参加する放送部

書道部
〔第60回記念南日本七夕書道展〕県書道会賞　吉野花音（３―３朝日中）　南日本書道会賞　畠山ゆずな（２―４金久中）　南日本芸術学園賞　原二葉（２―１朝日中）

大高一番星

上原奈々（うえはらなな）さん（２―６金久中出身）

今回の大高一番星は、来年夏に鹿児島県で開催される、2023かごしま総文（第47回全国高校総合文化祭）のイメージソング「にじいろの結晶」を作曲した上原奈々さんだ。この曲は、県内の中学校、高校などから公募された57作品から選ばれた。上原さんは小学校4年生の時から、友人の山田茉和さん（２―１金久中）と一緒に作曲活動を行ったり、「//なため」という名で、自作の曲やカバー曲をユーチューブに配信したりしている。

Q　かごしま総文のイメージソングを作曲しようと思ったきっかけはなんですか

A　教室にイメージソングを募集するポスターが掲示されたときに、私が普段から音楽制作や作曲をしていることを知っているクラスメイトが勧めてくれたことがきっかけです。

Q　どのように作曲したのですか

A　ピアノを使って伴奏を弾き、それに合わせて鹿児島玉龍高校の常森康二さんが作った歌詞を口ずさみながら、一週間位で制作しました。

Q　作曲で苦労したことはなんですか

A　歌詞を見たら、自然とメロディーが頭に流れてきたのであまり苦労した印象はありません。

一つあげるとすれば、作品は、伴奏を自分で歌った音を付けた音源を提出するのですが、私は小学校から中学校2年生の間ピアノは習っていましたが、決して得意ではないので、きれいに伴奏を弾くことに苦労しました。

Q　作曲の技術は、どのようにして習得したのですか

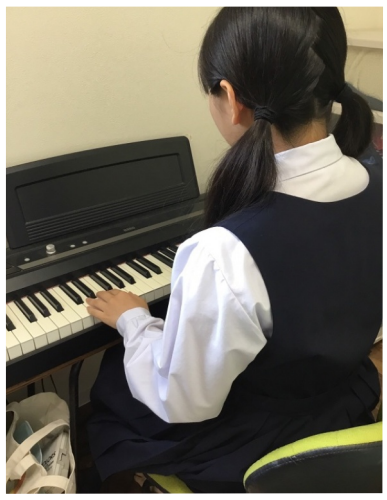
A　小学校1年生の担任がシンガーソングライターでもある浜田ゆかり先生で、私たち児童の詩に曲を付けてくださったことがきっかけです。それ以来、基本的には独学で習得しました。初めて作曲したのは小学校の4年生の時です。

Q　ユーチューブでの活動を始めたきっかけはなんですか？

A　自分が好きな曲が「ピノキオピー」や「遼遼」さんが作ったボーカロイドなので、いろいろな人に知ってもらうためにカバーをしてユーチューブに出しています。

Q　今後の目標を教えて下さい

A　これからもみんなの心に響く曲をたくさん作っていきたいです。



上原さんは「曲の材料は頭の中にあって、詩を見ると自分の頭の中に曲が流れてきます」と語った。

また、将来の夢が「福山潤」さんのようなマルチで活躍できる声優なので、正劇台本を読むなどして練習しています。

今回、イメージソングと同時期に応募して出演が決定した総文祭の劇にも精一杯取り組んで行きたいです。

「2023かごしま総文」のHPで、「にじいろの結晶」は混声合唱で鑑賞できます。ぜひ聴いてくださいね。

〔伊藤凜〕

陸上部

やり投げ・競歩で全国ねらう

陸上部は、短距離7名、長距離9名、マネージャー4名の20名で日々の練習に汗を流している。今回はその中でも、県総体で上位入賞し、南九州インターハイへの出場権を獲得した、原勇輔君（２―５東城中）と丸田脩人君（２―３朝日中）にスポットを当てて取材した。

原君は５000　南九州大会の丸田君のやり投げ

M競歩で県総体３位入賞、南九州で５位入賞を果たした。

試合を終えた原君は「県総体が競歩の初の試合だったので、自分の成績に嬉しさと驚きを感じました。しかし、南九州ではわずか2秒差で全国大会を逃してしまい、嬉しさより悔しさがこみ上げてきました」と振り返る。「来年は必ずインターハイに出場し、そして最終的には国体の選手になって、国体で大高旋風を巻き起こしたいです」と熱く目標を語ってくれた。

丸田君はやり投げで県総体で5位入賞、南九州では19位という結果だった。丸田君は「南九州は狙えると思っていたので、県総体で出場権（6位以内）を獲得することができて正直ホッとしました。しかし、南九州では悪天候と会場の雰囲気に圧倒され、どこか弱気になってしまっていた部分がありました」と振り返る。「これからは、どんな大会においても表彰台（3位以内）を目指していきたいと思っています。そして、来年はインターハイに必ず出場したいです」と意気込む。

南九州大会の原君の競歩

高校に入ってから陸上を始めた2人に、競歩、やり投げという競技を勧め、指導したのは顧問の当房晶広先生（数学科）だ。2人の成績に対して、「南九州では2人とも本来の力は発揮できていなかったが、それも実力のうち。来年はレースで緊張せずに力を発揮できるよう、一回り成長してインターハイを目指してほしい」と期待を寄せた。

当房先生（中央）と原君（右）と丸田君（左）の師弟の絆は強い

これからの陸上部について当房先生は「九州大会に出るような選手の日々の練習姿勢を見て、後輩が刺激を受ける、その積み重ねで部の雰囲気がつくられると思う。部員全員が陸上選手としても、人間としても成長してほしい」と語った。

多くの陸上部員が高校から始めた初心者だが、2人のように上位大会に出場し活躍する可能性は十分にある。これからも陸上部の活躍から目が離せない。

〔有田結愛〕

※記事中の本校生の個人名に併記した中学校名は，出身中学校です。

繋がり

鹿児島の初夏は、奄美とは違いカラッとした暑さで天気も良かった。硬膜動静脈瘻（こうまくどうじょうみゃくろう）の手術は奄美ではできないらしく、鹿児島に渡り手術しなければならなかった。

転院先は鹿児島市立病院で、祖父が付き添いで奄美から鹿児島まで一緒に来てくれ、当時鹿児島に住んでいた母と合流して、市立病院に向かった。市立病院を初めて見た時は、「何かの商業施設かな」と思ったほど、その綺麗さに驚いた。

母が受付を済ませ、脳神経外科に受付票を持っていく。2018年6月18日、入院初日のその日は血液検査などの検査や新しい担当医師と挨拶を交わした。先生はとても気さくな方で、話しやすく、更にはこの病気を過去に6、7回治しているという実績から、とても頼もしく感じていた。

6月22日、僕と母は先生のいる診療室で、一言一句漏らさないように先生の話を聞いていた。手術についての説明があったのだ。そこで知らされたことは、手術は6月25日と27日の二回で、一回目は足の付け根からカテーテルという1ミリメートル以下の管を入れ、脳の動脈と静脈が毛細血管を介さず直接繋がってしまっている瘻（ろう）という部分を金属のコイルで詰める「血管塞栓術」を、二回目は頭を開き直接異常部を離断する「開頭術」をするというものだった。

「ついに来たか」僕はそう思った。頭にメスを入れ、頭蓋骨に穴をあける。手術を受けることが決まってから自分でも治療法は調べていたが、先生の口から聞くと現実味が増した。怖いし、できることならやりたくない。誰でもそう思うだろうし、僕も例外ではなかった。

病室の夜はとても静かで、内容を知らされたその日も聞こえる音といえばナースコールの音と、看護師さんが押すワゴンの音だけで、こんな中一人で過ごしていると、意識せずとも不安は反芻されて強くなっていった。

次の日は曇り空で、外の淀んだ空気が窓越しにも分かった。母は週に2回ほど顔を出してくれ、いつもは2リットルのお茶などを抱えてお見舞いに来てくれるが、その日は違った。「これ見てみて」母はスマホを僕に手渡した。僕はそれを手に取り、画面を見る。写っている見慣れた顔と様子から、それが何なのかすぐ分かった。奄美では合唱コンクールの時期らしい。学校から離れた僕にとって、その様子を知る機会は少なく、僕はそれを見るのが楽しみだった。

ワクワクした気分で再生ボタンを押した僕だったが、いい意味で期待を裏切られた。

彼らの第一声を聴いた直後、次第に画面を見る視界がぼやけてきた。美しかった。他の誰よりも素直に入ってくる馴染み深い彼らの声は、学校から離れ仲間に飢えた僕にはあまりにも強すぎる薬だった。

合唱で歌っていた「遠く遠く」の歌詞が自分の境遇と重なった。本当は会いに行きたい。でも会いに行けない。そんなジレンマを抱えていた僕の心にその声と歌詞が響いた。

久しぶりに同級生の姿を見れて嬉しかった。でもそれと同時に、本当だったらそこに僕もいたはずなのに。という悔しさもあった。「手術を乗り越えて必ず戻るから。それまで時間がかかるかもしれないけど、絶対乗り越えて見せるから」と心の中で奄美にいる仲間と約束した。その時既に手術に対する恐怖なんてものは、僕から消え去っていた。

そして迎えた6月25日、僕は青白く光る手術室の前に立った。

〔野﨑瞬〕

しまんちゅ・釣り人発見

谷口隆太君
（3－2市中出身）

大高メンズの休日と言えば「釣り」。青空に抱かれての釣りは島人（しまんちゅ）の心もお腹も満たす最高の趣味。今回の釣り人は、後輩と釣りを楽しんでいるという谷口隆太君だ。

谷口君は、奄美に引っ越して来る前、広島県で小学校低学年の頃、祖父が連れて行ってくれた釣りに夢中になった時期があったという。

そして再び、高校2年の夏頃、釣りが趣味の東京から来た高橋周佑君（2－2深川第八中、大高ジャーナル第10号の本連載に登場）から誘われたことがきっかけで、再び釣りに目覚めたという。

釣りを再開して約1年という彼の釣りスタイルは、糸は細めのPE1号でのルアー釣りだ。よく釣りをする場所は、長浜だが、詳しくは「秘密」だとか。谷口君の秘密の釣り場はアジがよく釣れることから、最近はアジ釣りにハマっているそう。

そんな彼の釣り仲間は、釣りを再開するきっかけにもなった後輩、高橋君だ。高橋君には以前は出来なかった魚の捌き方も教えてもらったという。

釣り上げた魚は小さいものはリリースするが、大きいものはその場で締めて、寮に持ち帰り食べているという。

今まで釣った中で一番大きい魚は、3、4ヶ月前に某港で釣った40センチ手前のギンガメアジ。釣りあげたときは「美味しそう」と思ったが、その日は釣りをもう少し続ける予定だったため、持ち帰るまでにだめになるだろうと思い、海に返したそうだ。

谷口君にとっての釣りの魅力は、「掛かるまでのワクワク感と、釣れた時のなんともいえない爽快感」だとか。また、谷口君は釣りを、単なる趣味を超えて「無心になれる時間」としても大切にしているという。

谷口君は「奄美の海はやはり綺麗。これからも奄美で釣りを続けたいです」と語ってくれた。これからの釣りの目標は、「サイズの大きなものを狙う」と谷口君。

これから先、高校卒業後に島を離れても、奄美の海に戻ってきて、釣りを楽しんでほしい。

〔関佳世〕

ギンガメアジは内湾・サンゴ礁などの沿岸域に生息する。刺身や塩焼にしても美味しい。
〔WEB魚図鑑より〕

クイズ
コクト君とまーじんま！の答えよ♥

答えは、②「直進性と安定性」よ。

もともと、奄美大島ではイタツケという木造船を漁業に使っていたの。イタツケは、船底が平らで「安定性」に優れていて近海の漁に適した舟。そこに、沖縄から奄美にきた漁師たちによってサバニという木造船が伝えられたの。サバニは外洋の波がある海域を速く進むのを得意とする「直進性」に優れた舟。ただ船底が尖っているのでゆっくり走ると転覆しやすいの。そこで、イタツケとサバニの両方の長所を活かした舟を、大正10年に舟大工の海老原万吉（えびはら まんきち）さんが開発し、漁師たちの間で評判となり今の形になったのよ。

〔永喜海迅〕

今年の大熊漁港の舟漕ぎ競争から。子ども達に伝統が受け継がれていく。

放課後ぐるぐる

大高生の青春グルメを紹介する「放課後ぐるぐるめ」。「美味しく、お財布にやさしく、そしてインスタ映えする」の3拍子そろった学校近くの名店を紹介する。

今回訪れたお店は、学校から徒歩1分、手作り団子が人気の「おだんごびより」だ。

猫が団子を守っている看板が目印の、ほっこり笑顔になれる黄色い館。

店主の西和美さん（56歳）は、大島高校35回卒。お店を始めたきっかけを伺うと、「西商店を閉めたことで、母の身体が弱ってしまったんです。母が多くの人と触れ合って元気になって欲しいという思いと、母がかつて作ってくれた団子を多くの人に食べてほしいという思いで、このお店を開くことにしました」と教えてくださった。

店主の西和美さん

お店には、「みたらしだんご」を始めたくさんのお団子が並んでいて、どれもモチモチとした食感が特徴的とのこと。

西さんが、団子を作るために気をつけていることは、2つあるという。

1つ目は、材料。白玉粉だけでなく豆腐も使うことで柔らかくヘルシーな団子になるという。

タレも一から手作りで、「みたらし」は、奄美の黒糖、キビ砂糖を使用。あんこは、添加物が入っていないものを使っている。

2つ目は、天候に合わせて食感を調整することだ。団子やタレは、温度や湿度によって食感が変わるそう。そのため、団子を作るときに使う豆腐の量を変えることで、調整するという。

新たに誕生した商品もある。「ポテトだんご」（120円）や、「ポテトチーズだんご」（150円）だ。この商品は、西さんが北海道に嫁いだ時に義母が作ってくれたイモ餅を再現した商品だ。じゃがいもと片栗粉を使ったお餅だが、奄美で「イモ餅」というと薩摩芋を想像すると思い「ポテトだんご」と名付けたそう。他の団子とは違って、程よい塩味がおかずにもなりそうな一品だ。西さんの、イチオシは、「つぶあんだんご」（120円）。口の中で溶ける優しい食感と、どこか懐かしい味に思わず笑顔になる。

大高生へのメッセージを伺うと、「大高生が大好きで、西商店時代も、お店に来てくれた部活動生と話をするのが大好きでした。このお店にも、ぜひ遊びにいらしてください」と話してくださった。

お財布にも優しく、心も満たされるおだんご屋さんに、あなたも足を運んでみては？

おすすめの「つぶあんだんご」（右）と「ポテトだんご」（左）

おだんごびより
営業時間　11時～19時　不定休　奄美市名瀬安勝町5－24
学校正門を出て右折徒歩1分

〔島名真生　隈元莉々亜〕

〔新入部員募集中！〕新聞部では、新入部員を募集しています。兼部も大丈夫です。紙面が完成したときの達成感は最高です。あなたも高校生記者として学校と奄美の魅力を伝えませんか？